霊能少女　更科美晴シリーズ

阿僧祇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊能少女　更科美晴シリーズ

【Ｎコード】
Ｎ９４１５Ｘ

【作者名】
阿僧祇

【あらすじ】
蒙木台高校には１人の霊能少女がいた。人を助けない霊能者……その理由は、この土地に伝わる伝説と関わりがあった。　／　２００３年の秋、初めてホラーを書いた漫画原作の習作を、作品批評用のクローズ掲示板に載せたらなぜか好評悪評ともに殺到（笑）、リクエストに応えてシリーズ化してしまったもの。（笑）／　漫画脚本の形式です。

第一編「妄鬼堆（もうきたい）」（前書き）

シリーズ第一作・・・つーか、最初は読み切り想定の習作原作でした。

■主要人物＞

後藤哲男：主人公。転校生。

更科美晴：哲男の隣の席。無気力な美少女。

華村冴子：古文担当の教師。冷たい雰囲気も持つ美女。

老婆：哲男の一家の隣人。

第一編「妄鬼堆（もうきたい）」

［1］

□

ぐちゃっ…

暗闇の中でうごめいているモノ。

（くらくてよく見えない）

□

ぐちゃっ……ぐちゃっ……

複数。

□

ぐちゃ…ぐちゃ…ぐちゃ…

その中に見え隠れする、人間の手足。

（食われていることだけは分かる。）

□

カッ……

光。

□

光の中で冷たく微笑している少女。（美晴？）

［2］

□　坂道の先に見える校舎。

T「妄鬼堆」

□

バス停から出ていくバス。

残ってる哲男。

後ろが崖沿いの坂道。

［3］

□　見上げて

哲男「はぁ……この坂の上にあるわけね学校は」

溜息。

セミの鳴き声。

□　（場面転換）教室

休み時間になるところ。

黒板に古文。

キーンコーンカーンコーン……

ザワザワ……

華村「では授業を終ります」

□　哲男、隣の席の美晴に

哲男「更科さんだっけ？　教科書ありがとうところで学校の案内してくれない？」

［4］

□　冷たく見つめる美晴。

□　カタ……

哲男「あ……」

無視して席を立ち去ってしまう美晴。

□

哲男「なんだい、いったい！」

□　廊下を一人で歩いてる哲男。

□　何かに気が付く。

哲男「華村先生」

［5］

□

華村（古文の教科書を抱いてる）「あら後藤くん、一人？」

哲男「いやあ　隣の娘に案内頼んだんだけど振られちゃいました」

（誤魔化し笑い）

□

華村（意外そう）「あらあら……後藤くんてああいう娘が好みだったの」

□

哲男（ごまかすように）「あっ　いや……好みから行けば華村先生の方が……」

□

華村「ウフフ……上手ね。前の学校でもそうやって女の子を泣かせてたんだ？」

哲男「と、とんでもない！　そんなことしませんよ…」

□

華村（立ち去る）「まあいいわ。早くクラスにとけこんでね」

哲男「は、はい」

□　見送る哲男

バブルアウト

［6］

□　バブルイン

校庭の隅、大木の影。

小さな石の祠。

哲男「なんだろ、これ？」

□

覗き込むように石を見てる哲男。

哲男「お墓…じゃないよな。なんで学校にこんなものが？」
□
石に触れようとする哲男。
？？？「……触らないほうがいいわ。」
□
哲男の後ろにいた美晴。
哲男「更科さん？」
美晴「訳の分からないものにやたら触れるのは赤ん坊のすることよ」
□
カチン！（哲男）

［7］

□
哲男「触れてみなきゃわからないことだってあるだろ！？」
美晴「……忠告はしたわ」
フキダシでつなぐ
□
立ち去る美晴
哲男「なんだい、感じ悪ィ」
□　夕方
□　バス停
哲男「なんだかよそよそしい奴の多い学校だよなあ」「あの更科って女がとくに！」
バスが来る。

［8］

□　アパート。
鍵を捜す哲男。
□
隣のドアから出てくる老婆。

老婆「あら、おとなりさん？」
□
哲男「あ、こんど越してきました後藤です。父は仕事行ってますけど
　どうぞよろしく」
□
老婆「学生さんなのね、どちらに？」
哲男「蒙木台高校です」
□
　驚く老婆。
老婆「蒙木台……蒙木台……」
□
哲男「？」「なにか？」

［9］

□
老婆「いえ　別に」「ただあの丘はねえ…」
□
哲男「気になるな。教えてくれませんか、あの丘になにかあるんですか？」
□
老婆「私は結婚してから５０年　この町に住んでるんだけどね」
　「あの学校が建ったのはまだ１５年くらい前だったかねえ」
□
哲男「へえ……新しいんだ」
老婆「たけど、あの丘はねえ…」
□
哲男「あの丘に何か？」
老婆の声「まあ　ただの言い伝えなんだけどね」

［１０］

□
老婆「ずっと昔にこのあたりに人を食う鬼が出て」
「えらいお坊さんだか巫女さんだかがあの丘に封じたという昔話が伝わって
いるんだよ」
□
哲男（うれしそう）「へえ…」「僕　好きなんですよそういう昔話とか伝説とかの類」
□
哲男「もっと詳しく教えてくれませんか？」
老婆（避けるように）「さあねえ私も詳しくは知らないねえ」
□　隣の部屋に戻って行く
老婆（後ろ姿）「市立図書館にでも行って調べたら何かわかるかねえ…」
見送る哲男。
□
哲男「……」

［11］
□　市立図書館
□
看板「市立図書館」
□
哲男、調べもの中
哲男「げげっ、これ古文書じゃねえか……」
□
古文書の一ページ（草書体）
哲男「『夫れ当村は…あと読めねえ（汗）」
□
古文書をめくる哲男

哲男「なんとか　読める字がひとつでもないかなあ……」「ん？」

［12］

□

本の文章の中に「妄鬼堆」の文字

哲男「妄鬼堆……もうきたい？」

□　本を持ち上げて見てる哲男

哲男「当て字かなあ？　それにしてもやな文字……（汗）」

□

哲男「なんとか　ここに書かれてることを読んでみたいもんだけど……」「！！」

□　バブル・イン

教員室、華村の机。

華村「え？　郷土史料の古文書？」

［13］

□

哲男（4つ切り大の写真の束を手に）「そうなんです。崩し字がどうしても

読めなくて」

華村「後藤くんてかわったものに興味あるのね、若いのに」

□

哲男「へんですか？」

□

華村「ううん。そういう子、好きよ」

□

照れて上向いてる哲男

華村（写真を見ながら）「しかもごていねいに写真までとってくるなんて」

哲男「古文書は光を当てると痛むからって、コピーもストロボ写真もなかなか
許可されないんですけどね。今回はラッキーでした」

［14］

□
写真を熱心に見ている華村

華村「ふぅん…」

哲男「何かわかりました？」

□

華村「そうね……これはこの地方独特の書体で書かれているから私も
完全には……」「でも　資料があれば読めないこともないわ」

□

哲男「やったっ♪」

華村「そうね……一人では無理だけど二人で徹夜で調べればなんとか
意味が分かると思うわ」

□

哲男（意味に気がついて赤くなる）「二人で徹夜？」

□

華村「今夜宿直なの。夜に宿直室まで来てくれる？」「あ、でも泊りは
無理か……」

［15］

□

哲男（赤い顔）「あ、行きます　行きます！」
「親には先生に勉強を見てもらうって言う。ウソはついてません
！」

□
華村、くすっ

華村（色っぽく）「そう」「じゃ、待ってるわ」

□　廊下。
　上機嫌で廊下を歩いてる哲男。

哲男「♪」

□
　角でいきなりと呼び止められる

美晴「後藤」

哲男「！」

□

美晴「……」「華村先生には近づきすぎない方がいいわよ」

［16］

□

哲男「……」「なんで？」

□

美晴「忠告したでしょう」「訳の分からないものにやたら触れるのは
　赤ん坊のすること」

□

哲男「華村先生は訳の分からないものじゃねえだろ」

美晴「……」

□

哲男（ニヤニヤ）「ははあ　わかったぞ更科。お前　妬いてんだろ」
　「華村先生と更科じゃ月とすっぽんだもんな」

□

美晴「……」「忠告はしたわ」
　向こうへ振り返る。

□
　去って行く美晴。
　見送る哲男。

［１７］
□　夜の校舎。
□
　校庭を一人で歩いている哲男。
□
哲男「さすがに夜の学校は不気味だなあ」
□
哲男（上機嫌）「でも、美人教師と美少年（？）が夜の宿直室で二人きりっ！」
「何も起こるなって言う方が無理だよね」
□　昇降口
哲男「えっと、宿直室、宿直室」

［１８］
□　宿直室。
　電気は点いてる。
　テーブルには電気ポット。
哲男の声「こんばんは華村先生」
□
哲男「……」「いないんですか？」
□
　勝手に上がる哲男。
哲男「校内の見回りにでも行ってるのかな？」
□
　テーブルのところに座ってポットに
哲男「お湯　湧いてるのかな？」

［１９］

□
ポットに手を置く。
ベトッ…
哲男「！？」
□
哲男「なんだ、これ？」
触った手ににべたべたするもの。
□
ザワザワ……ザワザワ……
周囲に何かうごめくような気配。
□
ザワザワ……ザワザワ……
気配に気づいてびびる哲男。
［２０］
□
驚愕する哲男
□
周囲を取り囲んでる、わけのわからないスライム状の物体。
□
哲男「な、なんだこれ！！」
□
じわじわと近づいてくる物体。
□
哲男「う……」
□
うわあああああっ！！
絶叫して逃げ出す哲男。
［２１］

□

ダダダダダッ
ザワザワザワザワ
廊下を走る哲男。
だが、廊下にも物体があふれてくる。

□

哲男、走り続ける。
哲男「なんだ一体！」「先生！　華村先生ーっ！！」

□

ダダダダダ
廊下を疾走するイメージ。
混乱するコマ割
あふれ出てくる物体

□

□

□

□

□

カッ！
突然の閃光。目が眩む哲男。

［22］

□

階段の踊り場に立つ美晴。手にお札を持っている。
美晴「……だから言ったのに」
哲男「さっ、更科！？」

□

ザワザワ……
動きが遠慮がちになる物体。

□

カッ！
閃光。
美晴がお札を突き出すと物体が後じさる。
□
哲男「さ…更科！　助けてくれ、そのお札があれば大丈夫なんだな！？」

［２３］
□
美晴「ごめんなさい」「御先祖様ほどの力は私には無いの」
□
哲男「御先祖様？」
□
美晴「あれがこの丘から出ないようにするだけで私には精一杯」
「それも三ヶ月に一度生け贄を与えることでやっと抑えてられるの」
□
哲男「い、生け贄！？」
□
美晴「あれを蘇らせたのは、こんなところに学校を建てた人たち」
「でも　とっくに人柱になって貰ったわ」
□
哲男「なんなんだよ、人柱って！！」

［２４］
□
ぐちゃ…　ぐちゃ…
再び動き出す物体。
□
美晴「華村先生は後藤くんのことを気に入ったみたい」

「だから　あれを抑えるためにあなたも往って」
□
哲男「ちょっと待って！　華村先生！？　いったいそれ　どういう…」
どんっ
突き飛ばされる。
［25］
□
うわあああああああ！！
悲鳴で繋ぐ。
物体の方へ階段を落ちていく哲男。
ああああああ
□
悲鳴で繋ぐ
ぐちゃ…ぐちゃ…
食われていく哲男
［26］
□
美晴「だから忠告したのに……」「訳の分からないものにやたら触れるのは
赤ん坊のすることよって」「男ってみんなこれだから」
□
ぐちゃ…ぐちゃ…
食われている哲男の体。
□
美晴（冷たい微笑）「でも　華村先生は満足したみたいね」
［27］

□

ザワザワザワ…

□

ザワザワザワ…

□

ザワザワザワ…

次第にひいていく物体。

［２８］

□

美晴「さて…これでまた三ヶ月は大丈夫」

「そのうち美人が好きで生きのいい男の子がまた来るでしょう」

振りかえって去っていく。

□

暗い夜の廊下。

遠く、美晴が去っていく。

小さく「ザワザワザワ…くちゃっ」と

音が響く。

＜終＞

第一編「妄鬼堆（もうきたい）」（後書き）

■か・い・せ・つ

もともとシリーズ化するつもりはなく、読みきり漫画の原作として２００３年の１０月ごろに書いたのが『妄鬼堆』でした。ホラーの書き方がよくわからず（今でも苦手ですが）、試行錯誤してたのが文面からもわかりますね。

ところが、この「人を助けない霊能ヒロイン」の話を「もっと読みたい」と何人もに言われて続編『河童沼』を書き、さらに「美晴の心情に踏み込んだ続編を」と言われて『祟り祠』を……というように、毎回、掲載後３日間くらいに寄せられた批評をできるだけ全部反映させて１週間後までに次回を書くという、作者がめちゃくちゃに苦しいチャレンジ習作シリーズとなったのでした。（＾＾；

のちに何度も書き直すことになりいろんなバージョンができましたが、今回再発表させていただくのは、最初のバージョンに少し加筆修正したものです。

なお『霊能少女　更科美晴シリーズ』を最初に書いてから5年くらい後、何人めかの作画立候補さん（プロ）の抽象的な要求や掲載予定誌のコンセプトに合わせて書き直しを繰り返すうちに、いつのまにか『Ｄｒａｇｏｎ　Ｄａｗｄｌｅ（ドラゴンドウードル）　～竜の住む森』になっていたという事実は、作者の僕にもワケワカです。まぁあれはあれで楽しい話じゃないかとは思うけど。（笑）

なおこの物語は、現在、『御霊ヶ丘』という題名で何度目かのリメーク途中にありますが、これも習作であり、公開するかどうかは

未定です……たぶん未完に終わるでしょう。

「小説家になろう」には初回バージョンを、完結編までの正シリーズ7本と、リクエストに応じて書いた外伝シリーズ2本を載せる予定でおります。（このシリーズに関するリクエストにはもう対応できません（汗））

では、漫画原作にまだ慣れてなかったころの、さらに無茶な制約で書いた完成度最低（笑）という評価まで受けた習作シリーズですけれど、しばしお付き合いを給われたら嬉しっす！

第二編「河童沼（かっぱぬま）」（前書き）

■粗筋＞

紀久はイジメに遭っていた。ある土曜日の夜、河童も溺れるという沼で泳がされることになるが、そこに更科美晴が現れた。

■人物＞

水上紀久：主人公。苛められ者。

更科美晴：紀久のクラスメート。冷たい感じの美少女。

華村冴子：古文担当の教師。美女。（裏設定＝実は美晴に封じられてる妖霊）

春樹：いじめ者

達也：いじめ者

俊郎：いじめ者

ゾクA：原付で粋がってる珍走団

ゾクB：原付で粋がってる珍走団

第二編「河童沼（かっぱぬま）」

■物語＞

［1］

T「河童沼」

［2］

□　沼池のほとり。

そこに無表情で立つ美晴。

水面には葦の群生にゴミが浮いている。壊れたスクーターとか瓦礫とかも

見え隠れ。

□

錆付いて曲がり痛んでる看板

「みずにはいってはいけません　　××町教員委員会」

（小さく）

河童が溺れているユーモラスな絵。

□

お札を手にした美晴、ふと物音に気がつく。

ガヤガヤ…

声「いいから来いよ！」

□　沼池の全景。（美晴はすでにいない）

そこはかなり大きな沼。

ゴミが岸に打ち寄せている。

岸辺にやって来た男子の高校生たち、春樹、達也、俊郎、紀久。

［3］

□

達也「汚え貯水池。魚も住んでないんじゃねえの？」
□
俊郎「死んだ婆ちゃんが、ここ、溺れた奴が河童になったから河童沼って呼ぶんだっ
て。ま、どこにでもある話だけどな。」
不安そうな紀久。
□
春樹「河童か！　そりゃいいや！」
□
春樹「どうだい、河童大会やんねえか」
達也「なんだいそりゃ？」
□
春樹（ニヤリ）「この沼を泳いで渡るんだよ。」
□
ゴクリ……一同、緊張。
俊郎「あ、あぶなくねえか？」

［4］

□
春樹「なんだよ、高2にもなって河童が恐いのかオマエ？」
俊郎「そ、そんなわけじゃないけど…」
□
不安そうな紀久。
□
春樹「よし、土曜日の夜にやっぞ。オマエら逃げるなよ。とくに水
上！」
□
気が進まなそうに
紀久「あ…ああ。わかってるよ。」
□

わいわいと去っていく一同。

□

サーッ……

そよ風で波立つ水面

□

いつの間に来たのか、ほとりでお札を手に考えこんでいる美晴。

［5］

□

美晴（水面に向かって）「やめときましょうか……土曜日までは。ねえ？

その方がいいんじゃなくて？」

冷たく笑う美晴。

□

ポチャ…

水面に小さな波紋。

□　（場面転換）学校

キーンコーンカーンコーン……

華村「ではＳＨＲ（ショートホームルーム）を終ります。」

声「起立。…礼。」

［6］

□

帰り支度中の紀久。

美晴の声「水上くん」

□

紀久「更科？」

美晴「話があるんだけど、ちょっと付き合ってくれない？」

□

驚く紀久。
紀久「おれに？」
□
春樹「なんだぁ、更科？　愛の告白かぁ！」
達也「ひゅーひゅー！！」
□
美晴「……。そういうことしか頭にないの？」「下劣（ゲレツ）ね。」
□
春樹「なんだとコラァ！」
ガタン！
美晴「今は水上くんに用があるの。後にしてくれる？」
□
冷ややかな流し目で見る美晴。
□
ビビリの入る春樹。

［7］

□
教室を出て行く美晴と紀久。
その後ろで
春樹「ちっ！」
唾を吐く。
□
（場面転換）屋上
ヒュウウウ……と風が。
□
金網から見下ろしてる美晴の髪が風になびく。
その後ろに立つ紀久。
美晴「もうすぐ暑くなるわね」
□

紀久「あの　更科、話ってなに？」
□
美晴、振り向いて、作り物めいた明るい笑顔。
［8］
□
美晴（笑顔）「ねえ水上くん」「あの人たちとつきあってて楽しい？」
□
紀久、衝撃を受ける。
□
ごまかすように、
紀久「そ、そりゃあ友達だし……」
□
美晴の後ろから風。
美晴「友達…ね」「はたしてそうかしら？」
□
吹き出しで繋ぐ
紀久に背を向け金網の方に向き直ってしまう美晴。
うしろで困惑してる紀久。
［9］
□
美晴（後ろ姿）「あのね……我慢には二種類あるの」
「意味のある我慢と意味のない我慢。」
□
美晴（視線を横に移動させ）「意味のない我慢はするだけムダよ」
□
紀久（ごまかすように）「我慢なんかしてないよべつに。」
□

美晴、また振り向く。淋しい笑顔。
美晴「……」「そう。じゃあもう何も言わない。」
□
すれ違う美晴と紀久。
ふわっ……
美晴の髪が紀久の顔に。髪の香りが漂う。
美晴「憶えといて水上くん後ろについていること。先に行ってはダメよ、
絶対に」

（10）

□
顔を赤らめて呆然としてる紀久。
紀久を置いてさっさと行ってしまう美晴。

□　（場面転換）
達也「お、戻ってきた」
□
呆然とした表情で戻ってくる紀久。
春樹「更科となに話してきたんだ？」
□
達也「水上くぅん　あたちあなたのこと好きなの」
俊郎「ああん、ぼくたんも好き、ちゅっ　ちゅっ　てか！？」
ガハハハハハ！
□
紀久（心の声）「…下劣。」
□
春樹「なんだよオマエ」
紀久「あ、いや……たいした話じゃなかったよ」

［１１］

□

達也「俺たちに隠し事か？　テメエ、そういう奴だったのかよ！？」

紀久「ち、ちがうよ……」

□

紀久（汗）「だいたい、更科みたいな性格ブスとそんな話になるわけないじゃないか」

春樹「まあ、そりゃそうだな」

□

ふと目をやる紀久。

□

愕然とする紀久。

□

扉の影で冷ややかに見ている美晴。

［１２］

□

他の三人は後ろを向いて談笑してるるため気がつかない。

背を向け去って行く美晴。

（バブルアウト）

□

ポチャン……

水面に立つ波紋。

□

夜の闇の中、河童沼湖畔に立つ４人。

□

春樹、懐中電灯を手に

春樹「向こう岸に行きたいか～！？」

３人（いまいち気が進むまない）「おお～……」

［13］

□

春樹（紀久の後ろ衿を掴み）「よし、水上。オマエ一番手だ。」

紀久「え？　なんで…」

□

春樹「俺達が入る前に安全を確かめなきゃならないだろ」

「男なら根性見せてみろ、ホラ！　ホラ！」

□

紀久（捕まれてて）「わ　わかったよ自分で入るから放してくれよ…」

□

紀久、上着を脱ぎ始める

□

ハッ！

上着を脱いでるうちに気がつく紀久。美晴の顔が浮かぶ

美晴の声「後ろについていること。先に行ってはダメよ、絶対に」

□

振り向く紀久

紀久「あ、あのさ…」

彼をとりかこむ3人の影。

［14］

□

ドン！

紀久「あっ！？」

シャツを着たまま紀久は突き落とされる。

□

ボシャー…ン！

頭から沼へ落ちる紀久。

□

達也「どうだ水上？　深さは？　水温は？」
春樹「へっへっへ…」
□
　バシャッ！
紀久「だ、大丈夫……ちょっと冷たいけど泳げないことはないよ」
□
春樹「よし、そのまま向こう岸まで行け」
□
紀久「え……」
春樹の声「安全を確認するんだよ、早く行ってこい。テメエ男だろ！！」

［15］
□
紀久「わ、わかったよ…」
　泳ぎ始める紀久。
□
達也「ほんとうに行っちまいやがんの」
俊郎「バカじゃねえのあいつ」
　と、エンジン音が……
　ブロロロ・・・
一同　「！？」
□
　ブバン　ブバババ！
ゾクA「ひやっほーう！！」
ゾクB「ファルルルルルルルッ！」
　暗闇に交錯する原付のライト

［16］
□

春樹「やべえのが来やがった行こうぜ」
俊郎「水上はどうすんだよ」
□
春樹「ほっときゃいいよあんなやつ」
去って行く三人。
俊郎はちょっと気になってる様子。
□
ゾクA「いや～、危なかった」「オマワリ撒けたななんとか」
ゾクB「ん？　沼になんかいねえ？」
□
ばしゃっ…
泳ぎながらゾクから隠れようとする紀久。
□
ゾクA「ま、まさか河童！？」
ゾクB「なにっ！？」

［17］

□
ブババババハ！
水面に向けられるヘッドライト。紀久の影が浮かび上がる。
□
ゾクA「人間じゃねえか、おどかしやがって」
ゾクB（石を投げる）「ふざけんじゃねえ！」
□
ガッ！
紀久「！！」
石が頭に当たる。飛ぶ血。
□
岸から次々と石を投げる二人。
ゾクA「こんな時間にこんなとこで泳いでんじゃねえよ！」

ゾクB「ケーサツ呼ぶぞ、ケーサツ！！」
ヒュッ
ボチャッ！
ヒュッ！
ボチャッ！
慌てて逃げようと泳ぐ紀久。

［18］

□
葦の茂る岸に上がってへたばってる紀久。
頭から血を流してる。
紀久「はあ　はあ　はあ……」
ブロロロロ……
二人が去っていく音。

□
ファサ……
紀久「！？」
突然、頭にかぶさるタオル。

□
そこに美晴が立っていた。
紀久「更科！？」

□
美晴「……」「…下劣ね。」

□
背を向けてしまう美晴。
紀久「あ……」

［19］

□
なんとなくタオルの端を口に当ててる紀久。

□
暗い水面に、二つの目のようなものが見ていてる。その側に浮いてる、
墨の滲んだお札。
□
ボチャッ……
その何かが潜っていく。が、岸に座り込んでる紀久は気がつかない。
□　（場面転換）学校の教室
ガヤガヤ……
□
春樹「水上…てめえ、逃げたろ！」
紀久「え！？」

［２０］

□
春樹「俺達が戻ったらテメエはもういなかった。友達を置いて一人で逃げやがったな！！」
紀久「ち、違うよ……」
達也「何が違うんだ、てめえ！」
□
紀久「おれ、ちゃんと泳いで渡ったよ…」
□
春樹「このヤロオ、見てないと思って好き勝手なこと言いやがって……」
□　（場面転換）
三人に引きずられるように歩いてる紀久。
紀久「や　やめてくれよ」

春樹「いいから来い！」

［21］

□　河童沼湖畔。

春樹（突き飛ばす）「ホラ　泳げよ！」

紀久「あっ！」

□

春樹「一回泳いだんだから、二度目は簡単だろ？」

達也「そうだそうだ」

　跪いてる紀久。

俊郎「手伝ってやろうぜ」

□

春樹「それ！」

　わっせ！　わっせ！

　三人に抱え上げられてる紀久。

紀久「や、やめてくれーっ！」

［22］

□

　バシャーン！！　学生服のまま水中に投げ込まれる。

□

　ドッ

　笑ってる3人。

達也「どうだい湯加減は」

□　水面に顔を出してる紀久。

紀久「一昨日より冷たい…足にも何か…」

□

　水中に二つの目が光る。

□

　ヒュッ

春樹（石を投げながら）「何やってんだよ、はやくく泳げよ！」
達也（何かに気がついてニヤリ）「おい」
□
ボチャッ
飛んでくる石。
紀久「待ってくれ　何かに足を掴まれてるみたいで……！」
□
見上げて驚愕する紀久。
［23］
□　3人が壊れたスクーターを抱え上げてる。
□
紀久（絶叫）「やめろぉぉぉぉっ！」
□
バシャーーーーン！！　紀久に命中するスクーター。
［24］
□
ゲラゲラゲラゲラ
達也「はやく泳がねえから悪いんだぞー水上！」
□
水面に広がる波紋。
□
俊郎「…おい、浮いてこねえぞ？」
達也「やべえんじゃねえの？」
□
春樹「し、知らねえよ。あいつが勝手に溺れたんだ。帰ろうぜ。」
達也「あ、ああ。」
□
静かになる河童沼。

［２５］

□　日暮れの河童沼。岸に立つ美晴。水面にはさざ波。
「みずにはいってはいけません」の看板が折れて倒れ掛けている。

□

美晴（溜息）「まいったなあ……もう少しで和魂（にぎみたま）にしてあげられたのに」「これで元の木阿弥。」「まさか水上くんが贄になっちゃうなんて」

□

美晴「荒魂（あらみたま）の水神さん…水上くんの魂を鎮めるのを手伝ってあげてね……」
ビリッ……お札を破る。

□リー…リー…リー
破れたお札が浮かぶ夜の水面
に光る二組の目。

［２６］

□　春樹の部屋。（夜）
布団を被って震えてる春樹。

□

春樹（大汗をかいて）「俺のせいじゃねえ俺のせいじゃねえぞ…」

□

コンコン・・・
窓を叩く音。

□

春樹、窓に目を

□

コンコン・・・

□

春樹、窓を見て驚愕。

［27］

□

闇の中に浮かぶ二つの顔。

はっきりとは見えないが河童のような。

□

驚愕する春樹。

□

うわあああああ……ひぃぃぃぃぃ……

夜の町に響き渡る悲鳴。

［28］

□

教室。

ザワザワ・・・・

誰か「また行方不明が出たって？」「今度は4人もだってよ」「この学校

呪われてんじゃねえの？」

□

華村「はい　静かに！　HRを始めます」

声「起立！　礼！」

□

席につき横を見る美晴。

机の上の花瓶が見える。

□

机の花瓶にそよ風が。

モノローグ「こんどは本当に友達ができたわね。同じ『水神（河童）

『の
友達が…」「ね、水上くん」
□
クス……
冷たく笑う美晴の口元。

<終>

第二編「河童沼（かっぱぬま）」（後書き）

２００３年の１０月ごろ。批評をもらって参考にする場所で、人助けをしない霊能ヒロインの出てくる習作『妄鬼堆』を載せてみたら、「更科さんの話をもっと読みたい」と言われまして。、当時近所にあった貯水池の横を通ったときに思いついた勢いで、構想取材込み２日で書いた続編でした。

この時点ではまだシリーズ化するつもりはなく、思いつきで即書きしてるだけだったんですが……（笑）

のちに「小学生ならともかく高校生にもなっていじめで水に落とされたり泳がされたりなんてリアリティない」という批評もありました。でも僕はやられたことあるんスよね……たしかに高校のときはなかったけど、中学のときにも大学のときにも。（汗）

だから田舎の高校ならありえるかなと思ったんですが……どうなんでしょう？（汗）

第三編「祟り祠（たたりほこら）」（前書き）

■粗筋＞

博昭は、不可解な少女・美晴のことが気になる。博昭のアタックにペースを崩した美晴だったが、ある日、博昭は荒御霊の復讐を受けることに……。

■人物＞

更科美晴：冷たくて無気力な感じの美少女。
真里谷博昭：美晴に興味を持つ男。
華村冴子：古文担当の教師。美女。実は
　美晴に封じられてる妖霊（荒御霊）。
岩神泰道：美晴の養父。
男子Ａ：博昭の級友。太目。
男子Ｂ：博昭の級友。長髪。
男子Ｃ：博昭の級友。小柄。

第三編「祟り祠（たたりほこら）」

［1］

T「祟り祠」

［2］

□

シャッ！

御幣が振られる。

□

道端の小さな祠（京都の路地にによくあるような）

□

美晴、道端の祠に祝詞を上げている。

後ろから全景

美晴（御幣を捧げ目をつぶり）「高天原に御おやすめ大神（おほかみ）　数多（あまた）の神たちを

集（つど）えて永遠（とことわ）に神つまります」「神ろぎ神ろみの命（みこと）もちて

神（かむ）いざなぎの命　筑紫（つくし）の日向（ひむか）の……」

祝詞を唱えていなければただの女子高生なのだが……。

□

美晴「神ながら霊（たま）ち栄（は）えませ！」

柏手。パン！　パン！

□

祠の前にお供え物が。酒徳利２つ、米、塩。

［3］

□

離れたところをガヤガヤと通りがかる

男子高校生たち４人。その中に博昭も。
博昭、美晴に気がつく。
□
博昭「なんだ、あれ？」
男子Ａ「ん？」「ああ　２－Ｅの更科じゃないか」
□
祠の前に立ち尽くす美晴の後ろ姿。
博昭の声「なにやってんのあんなとこで？」
誰かの声「変わった奴なんだよあいつ。ユーレーが見えるって噂だぜ」
「霊能少女かあ？　うっさんくせ～」
□
凝視する博昭。
誰かの声「変な奴でなけりゃルックスは悪くないんだけどな～」
「なんだオマエああいう暗いのが好み？」
□
ふきだしで繋ぐ。
博昭から見た美晴の後ろ姿。
誰かの声「いや、なんつうかこう、背筋ゾクッとくるようなところがあるじゃん」
「お前は　背筋じゃなくて下の方がゾクッとしてんじゃねえの？」
「…きみ、下劣ね。」

［４］
□　学校。
看板「蒙木台高校」
□
廊下を歩いてる博昭、窓の外を見てふと気がつく。
□

花壇の側で、下を見て立ってる美晴。
□
博昭、窓から顔を出し
博昭「更科さん…だっけ？　何やってんの？」
□
美晴、ふりむき、悲しげな目で博昭を見つめ返す。
［5］
□
窓から外へ出る博昭。
博昭「何かあんの　そこ？」
美晴「死んでるの」
□
博昭「え？」
□
雀の死骸。虫がたかってる。
□
博昭「うわ……ひでえ」「お墓つくってやるのか？　手伝おうか？」
美晴「自然死は摂理……繕っても穢れは穢れ。埋葬したところでただの
自己満足だわ」
□
博昭（驚いて）「…女の子らしくないこと言うね、更科さん」「かわいそうとか
思わないの？」
□
美晴、横目で博昭を見て
美晴「……」「もっとかわいそうなものがいろいろある」
［6］

□　背を向けて去る美晴。
□　下を見ながら
博昭「なんなんだあいつは」
□
　虫がたかった雀の死骸。
□
博昭の声「けっ！」
　雀の死骸を踏み潰す博昭の足。
□　（場面転換）教室。
　休み時間の教室。
誰かの声「そうそう　あそこの女学院のコでさ」
　「ぬかせ」
　はっはっは

［7］

□
博昭「しかし……寄ると集まると女の話だな俺達って」
男子B「しょうがねえじゃん、年頃なんだから」
　ははははは……
□
　考え込んでる博昭。
誰か（博昭の後ろで）「その割に　今、つきあってる相手がいなかったりして」
　ははは……
誰か「この年で1人の女に縛られたくねえよ」
　ははは……
□
男子A「なあ、真里谷！」
博昭「え？　あ　ごめん、聞いてなかった」

□
男子Bの声「どうしたんだよおまえ、このごろ少し変だぞ？」
博昭の声「いや　なんでもねえよ、ちょっと調子悪いだけだ」
　扉の外から悲しそうな顔で覗いてる美晴。

［8］

□
　廊下。
誰かの声「そうかあ？　あやしいぞ」
　はははは……
　キーンコーンカーンコーン……と音が響き、
　教室の外では廊下できびすをかえす制服のスカート。（美晴）

□　教室。
華村の授業。
朗読「二星（にせい）　偶々（たまたま）逢えり……」

□
　窓から外を見て気がつく博昭。

□
　グランドでは体育の授業中。ランニング
　してる中に体操着姿の美晴も。

□
博昭（心の声）「あれで変人でなければなあ……」

□
　へたばってしまってる美晴。
　どんどん抜いて行くクラスメート。
博昭の心の声「あ　体力ない」
　くすっ

□キーンコーン……

［9］

□

水で顔を洗ってる美晴。

□

美晴の後ろから

博昭「よっ　更科さん」

気がつく美晴。

□

タオルで顔を拭く美晴

美晴「……気安く呼ばないで」

博昭「じゃあ、美晴ちゃんて呼ぼうか？」

□

タオルの影で目を見開いて赤面してる美晴。

□

タタタタタ……

走り去っていく美晴

博昭（心の声）「お　脈アリ♪」

［10］

□

教室で席についてる美晴。

ひょこっと顔を出す博昭。

博昭「更科さんっ」

□

校庭、大木の側に立ってる美晴。

博昭「なにやってんの？」

□

廊下でゴミバコを運んでる美晴

博昭「手伝おうか、美晴ちゃん？」

□
美晴（不快そうに）「……つきまとわないで！」
□
博昭「怒った顔もまたいいね」
　驚く美晴。
□
　ぷいっとして去って行く美晴。

［11］
□　教室
男子B「真里谷〜　おまえこのごろ更科をおっかけてるんだって？」
□
男子A「なんだそれ、聞いてねえぞそんな話」
博昭「まあまあ……ちょっと興味があってさ」
□
男子C「まあたしかに、俺達がつきあった女にああいうタイプはいなかった
　けどさ」
男子A「にしてもゲテモノ〜」
□
博昭「どうだ、俺が更科をオトせるかどうか賭けねえ？」
□
男子A「乗った！」
男子B「よし俺も失敗に五百円！」
誰か「セコいなお前（汗）」

［12］
□　町中。帰宅途中の美晴。
　うしろに博昭。
□

美晴（振り向いて冷ややかに）「ついてこないでよ」
□
博昭（ニッコリ）「たまたま行く方向が同じなだけだよ」
□
美晴（背を向け）「どこへ行くの？」
博昭「さあ？　足の向くまま気の向くまま……」
□
日暮れ。
［13］
□
木々に囲まれた木製の鳥居がいくつか。鳥居の上に「常川稲荷」と汚れた
看板。手前には壊れかけたた狐の石像。
□
美晴の後について鳥居をくぐる博昭。側に稲荷神の祠がある。
祠には小さな狐の人形が並べられてる。
博昭「稲荷神社？」
□
パン…パン…
稲荷祠に柏手を打ってる美晴。後ろで見ている博昭。
□
祠を離れる美晴。
博昭「もしかして……更科ん家ってお稲荷さんの神主さん？」
□
美晴（振り向き淋しそうな顔で）「さあ？」「使い魔のお狐さんかもね」
［14］
□

５０年くらい経ってるような建物の前。
扉は曇りガラスの引き戸。
木の塀は崩れかかって、庭は草ぼうぼう。
美晴「ここが私の家。お察しの通り稲荷祠（ほこら）の管理人よ」
「これで満足でしょう帰ってよ」
□
博昭「今度　遊びに来てもいい？」
□
美晴「……」「度を過ぎた好奇心は身を滅ぼすのよ」
□
博昭「いや好奇心とかじゃなくて更科さんと友達に……」
ピシャッ！
美晴、扉を閉じてしまう。
□
［１５］
□
溜息をついて微笑する博昭
□
博昭「じゃあ　また明日…」
振り返る直前に気がつく博昭
□
表札に「岩神」の文字。
□
驚いてる博昭。
□
玄関の中。
開いている小窓の外で博昭が帰っていく。
そちらに背を向けて、下を向いて困惑している美晴。
□
フゥッ

溜息を吐く美晴の横顔。

［16］

□　暗い部屋に正坐してる美晴。

美晴「伯父さま、ただいま帰りました」

□

　布団が敷いてあるが、暗くてよく見えない。

泰道「美晴ちゃんか」「どうだ　学校の様子は？」

□

美晴（悲しそうに）「……だんだん悪くなっていきます」「学校に限らず

　このあたりに荒御霊（あらみたま）が多すぎます」

□

美晴「せめて　先生の姿をとってる荒御霊をこの蒙木台から外へ出さない

　だけで私には精一杯で……」

□

泰道「そうか……」「人の心が荒れれば御霊も荒れる……しかたないのかな」

　ゴホッゴホッ

　バブルアウト

［17］

□　教室。

□　右を見てる美晴。

□　左を見てる美晴。

□　通りすがりの華村。

華村「どうしたの更科さん？」

美晴「華村先生……！　いえなんでも」

□

華村「まるで誰かを捜してるみたいだったけど？」
□
美晴（顔を赤らめ目を逸らす）「……」

［18］
□
華村「ところで……そろそろ季節が変わるわね」
□
美晴「……」「贄をお求めですか。でもいなくなっても気にされない人が
今みつかりません」
□
華村（にっこり）「うふふ……私は別にこだわらなくてよ？　たとえば……
２－Ｂの真里谷くんなんかどうかしら」「真里谷博昭くん。」
□
ビクッ！！
表情がこわばる美晴。
□
華村「うふふ……あなた次第よね」
去っていく華村。
拳を握って見送ってる美晴。

［19］
□
トイレの前を歩く美晴の足。
声「この２・３日、どうしたん？　更科は諦めたの？」
□
おどろく美晴。
□

男子トイレ。博昭と男子A、B。
博昭「へへへ　手だよ　手！　側にいるのが当たり前になっちゃったころ、
急に離れられると今度は物足りなくて淋しく感じるものなんだ」
男子B「たしかアカネや千沙ちゃんもその手でオトしたんだよなお前」
□
ははははは…
博昭「でもふられたじゃん」
男子A「何言ってんだよ、飽きて向こうから別れるようにしむけたくせに」

［20］
□　廊下。
博昭の声「それはそれとして今度は賭け金ごまかすなよ？」
誰かの声「わかってるよお前が更科をオトせたらちゃんと払うって」
ははははは……
立ち尽くしてる美晴の足。

□　（場面転換）雑草に囲まれたちいさな祠の前。
美晴に後ろから声を掛ける博昭。
博昭「更科さんっ　久しぶりなにやってんの？」

［21］
□
美晴（ちらっと見るだけ）「……」
□
博昭「拝んでたわけ？　更科さんってやっぱ宗教家？」
美晴「……あっちへ行ってよ」
□

博昭「熱心だね。恋愛運でも祈ってたの？」
□
去り際に
美晴「あなたたちみんな色情霊にでも憑かれてるんじゃないの？」
「……下劣ね。」
□
フキダシで繋ぐ。
去ろうとする美晴。
博昭「ちぇっ！」
ガッツ！　博昭、祠を蹴飛ばす。
［22］
□
無表情のまま目だけ驚愕してる美晴。
□
倒れた祠。
□
美晴（汗）「な……なんてこと！」
博昭「え？」
□
美晴「自分が何をやったかわかってるの？」
□
博昭「罰が当たるって？　迷信だよ迷信」「こんな小さな祠に神様なんかいねえって。せいぜい低級霊さ」
□
美晴「霊に低級も高級もない！　この祠がここにあるのは……！！」
ドロドロドロドロ……
［23］

□

ザーッ！

いきなり降り出す雨。驚く博昭と立ち尽くす美晴。

博昭「うわっ！？」

□

ビシャアッ！

いなづまの光に雨に濡れながら

美晴「結界が壊れて荒御霊（あらみたま）が解き放たれた…もうどうしょうもないわ

贄が無ければおさまらない……」

□

雨を避けようとしながら

博昭「え？」

□

バシャ……バシャ……

去ってゆく美晴。

呆然としてる博昭。

□（場面転換）雨の中の常川稲荷。

ザーーー

ザーーー

［24］

□

ザーー・・・

稲荷の祠の前で雨に濡れてる美晴の後姿。

□

頭からぐしょ濡れの美晴。

博昭の笑顔が浮かぶ

博昭（回想）「更科さんと友達に……」

□

沈黙している稲荷祠。雨に濡れてる小さな狐の人形。

□

美晴「『狐は鼠を追い払って大切な穀物を守るだから稲荷神の使いとされた』……和御霊。」「でも西洋では狐は家畜を殺す害獣……悪魔　つまり荒御霊」

□

濡れた地面に、膝をついてぺたんと座り込んで、うな垂れてる美晴。

美晴「私は……いつまで何も知らない人たちを贄に捧げ続けなければならないんですか！」「荒御霊はどうしたらみんな和御霊になってくれるんですか！？」

□

髪から垂れる雨しずく。

美晴「いつ……友達を作っていい私に……なれるんですか」

「教えてください……お狐様」

［25］

□

ザァァァァ・・・・・

座り込んだ美晴と沈黙する祠の上から降り続けてる雨。

□

沈黙してる狐の人形。

□

雨の降り続ける森。

□

雨の降る町中。

□　（場面転換）博昭の部屋。

博昭「う～、濡れた濡れた。いきなり豪雨ってなんだよあったく。」

半裸で、タオルを使っている。
ぴんぽ～ん

［２６］
□　玄関
博昭「はい……え！？」
□
玄関の前にに傘を持って立ってたのは華村。
ザーーーー
博昭「華村先生！？　なんで……」
□
華村（無気味に笑い舌なめずり）「うふふ……」
□
博昭「？」
□
ビシャァァァッ！
落雷とともにいきなり溶けてゲル状の物体となる華村。
博昭の声「！！」

［２７］
□
ゲルに飲み込まれていく博昭。
博昭「なんだ！　なんだこれはあああっ！？」
□
雨の中、傘もささずに遠くから見ている美晴の姿が。
□
博昭「更科！　更科！　助けてくれぇ！」
□
しかし飲み込まれていく博昭。

うわあああああ……

□

どんどん飲み込まれて行く博昭。

［28］

□

ゲルの中に浮き出る華村の頭部。

華村「更科さん、あなたのものをとっちゃったかしら？　ふふふ……」

□

雨に濡れて怒りの表情の美晴。

□

華村（またゲルに溶けていきながら）「あらまあ……嫉妬してるのね　あなた……ふふふふふ」

□

雨か涙か、美晴の頬に流れるもの。

美晴「…下劣ね。」

美晴は歯を食いしばり、雨雫を払うような手つきでお札を額の前に掲げる。

＜終＞

第三編「祟り祠（たたりほこら）」（後書き）

当時『河童沼』にいただいた批評、「もっとヒロインの心理を描くべき」「設定がよくわからなくて不親切だ、ヒロインの設定を説明しろ」他いったいくつかの批判に対応して書いた話でした。

これを掲載した後、「これはシリーズ物ではなく連載物にしないとダメ。ヒロインにライバルも登場させないといけない。また、主人公が毎回変わるのもダメ、美晴自体を主人公にすべき。」というような批判もあり、それに従ってこの次の『浄霊者』からは美晴が主人公の連続物として書かきました。

……そうしたら雰囲気が変わってしまい、「完成度が落ちた」とも言われましたが、もともと苦手ジャンルを無理な制約で書いててそんなに何もかも完璧にできる力があるなら、とっくにプロで活躍しとったろうし。（ＴＴ）

では次回もよろしくおねがいします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9415x/

霊能少女　更科美晴シリーズ

2011年10月29日03時18分発行